

## 強制と自主独立の間 —日本共産党「軍事方針」をめぐる国際環境(1949～55)— (6)

松 村 史 紀

### XI 領袖の采配 —モスクワ会談

#### 1～4 前稿

#### 5 出発の情景

日共内紛の調停が中共の手にあまるものであったことは、関係者を乗せた列車が北京を発つその情景にいみじくも表れている。4月半ばごろになって、王稼祥が「袴田同志、モスクワ行きは、徳田同志たちと同じ車両でいいですか」と尋ねてきたという。これに答えて袴田は「だめです。彼らの顔を見るのもいやです。下手をすると汽車のなかで喧嘩になるかもしれませんよ」と返したらしい。結局、「特別列車に車両が一つ余計につながれた。一つの車両に徳田、野坂、西沢。もう一つの方に王稼祥と李初梨、そして私。ほかに中国の防衛の人たちが乗る車両と、食料品などを積んだ車両がつながれ、四、五両編成の特別列車になっていた」という<sup>1</sup>。

この外観がどうやら当時の力関係を具現化したものであったとみえる。いがみあう両派をかううじてそれぞれ別個の箱に閉じ込めるのが中共の務めであったとすれば、それを開封して最終決着をはかるのがクレムリンの引き受けた役回りだったからである。

最終目的地までは「九日かかった」と記憶する袴田であるが、「その間、徳田たちと顔を合わせたのは一回きりであ」ったという。満洲里で「中国の防衛とソ連の防衛が入れ替わり、ソ連の党国際部から副部長が迎えにやってきた」とき、「主賓（つまり私や徳田たち）と、中ソ両党の指導者が一緒に食事をする事になり、一つの車両に集まったが、私は徳田たちとはひと言も口をきかなかった」らしい<sup>2</sup>。

はなから恨み節の袴田が認めた文章であるからそこに誇張は付きものだろうが、安斎庫治の追憶もまた似た情景をなぞっている。モスクワへは「徳田とぬやま〔西沢隆二〕と野坂が行ったんです。それから同時にモスクワに行くときには袴田も行ったんです。ところが袴田とは当時顔も合わせんのですよね。

特別列車で行ったんだけれどね」<sup>3</sup>。

主流派はその領袖である徳田を頂きながら西沢、野坂が同伴したようだが、たいする国際派は袴田ひとりが現地に乗り込んだというから最初から後者の劣勢はあきらかである<sup>4</sup>。北京を発つまえに袴田は中共に「宮本顕治に来るように伝えてほしい。北京に来たら、飛行機で大至急モスクワに飛んで来るよう手配も頼む」と託けたようだが、それが叶うことはなかったという。「私の伝言を宮本に伝えなかったのか、伝えても来なかったのか、それはわからない」というのが袴田の疑念であるが<sup>5</sup>、伝えようにもうまく伝わらなかったという情報経路の不備も悪条件に加わっていたのかもしれない。

#### 6 謁見前夜

密航を重ねて北京に身を寄せ、あげく遠路をいわず来訪した日本の同志、モスクワにおけるかれらの動静を後年伝えたのが先方の通訳アドイルハエフである。いわく、「代表团は1951年4月末に到着し、約1ヶ月半ソビエト連邦に滞在した」。後述のとおり、実際の滞在期間や北京への帰還時期についてはなお不明な点が多いものの、スターリンとの一連の面会を終えるまでにそれなりの時間を浪費したことは他の資料からも明らかである。

「北京からモスクワに到着した代表团は書記長・徳田球一、野坂参三、西沢隆二、そして反対派を代表する袴田里見から成っていた」が、その世話役に当たったと思しいのが中央委員会委員 V. グリゴリヤンである。「日本人同志のモスクワ滞在に関するいっさいの問題に従事していた」のがかれだという<sup>6</sup>。

当時、朝鮮半島の難事だけでも相当な時間と労力を費やしていたクレムリンの領袖にとって、日本の同志との面会はけっして優先順位の高い業務ではなかったろうから、徳田らの希望どおりに会談が用意されたとはとても思えないが、身辺の世話だけは行

き届いていたようである<sup>7</sup>。反主流派の袴田も周知な配慮がなされていたことは認めている<sup>8</sup>。

対立両派の関係がこじれないよう宿泊先をそれぞれ別に用意したというのも先方の心配りであろうか。「徳田、野坂、西沢はモスクワ近郊の別荘に配置され、袴田はモスクワ市内のアパートに住んだ」とするアドイルハエフはつぎのようにも書き残す。

わたしはつねに徳田、野坂、西沢とともにいた。かれらはモスクワ滞在の全期間をつうじて袴田と会ったことはなかったといってよい。実際、われわれはスターリンからの呼び出しを待って大半の時間片時も離れず別荘で過ごした。5月の祝日にはデモと軍事パレードに参加し、5月1日と戦勝記念日にさいしてきれいに飾られた市街に何度か旅行をした。ある日、わたしは会話のなかで袴田について触れた。しかし、徳田と野坂はかれがモスクワに来ていようが、かれがどこにいるのか知りたくないし、まして会いたいなどとは思わない、といくらか軽蔑したように述べた。<sup>9</sup>

現地モスクワで徳田らと没交渉であったことは袴田自身も認めるところである。いわく、「徳田たちがどこに泊まったのか、また、どんな待遇を受けたかは知らない。モスクワでも、全く接触はなかった」<sup>10</sup>。

終盤になってようやく面会の席に呼ばれた袴田とは対照的に、スターリンとの一連の会談に最初から応じてきたのはあくまでも日共主流派であった。印共幹部の対立両派が最初から同席してクレムリンの指南を受けていたのとは好対照をなす（第5稿参照）。

その面会についていえば、初回の会合は5月中旬にもたれているが、その数週間前に先方は通訳を用意している。その当人の述懐にいわく、

1951年4月、わたしは一連の同志ともどもソ共中央国際部に呼び出され、その場でわれわれは『日本語に関して責任を負うべき業務がある』と通告された。中央委員会の責任者との長く、詳細にわたる会談のあと、わたしを含む四人が選抜されたのだった。そのときになってはじめてわれわれは日本共産主義者の代表団が到着してスターリンと

面会するのを待っていることを知った。<sup>11</sup>

この回想から推せば、日中両党の関係者一行がモスクワに到着した4月下旬ころになってようやくソ連側が通訳を選定したことになる。

さて、肝心の会見である。「この間、[日共]代表団とスターリンの会見は4回行われた」というが、その日付は判然としない。初回が5月中旬であることを除けば、他の日取りはまったく不明である<sup>12</sup>。

王稼祥の公刊年譜にはかれがクレムリンの幹部と面会した日付が刻印されている。いわく、5月3日、「ソ共中央対外政策委員長グリゴリヤン同伴のもと、モスクワ郊外別荘でスターリンと会見する」。この「会見と談話に同席したのはモロトフ、マレンコフ、ベリヤ、中国側通訳林莉である」。ここに徳田ら日共幹部のすがたは記録されていない。年譜はつづけて同日、「中共中央を代表して日共両派の分裂問題についてソ共中央と第一回の協議をした。14日に第二回協議、6月6日に第三回、第四回協議」をしたと記す<sup>13</sup>。初回の5月3日は日共不在の中ソ両党会談であったと思しい。第二回以降については一部日共幹部の参加した会談と重複しているのかもしれないが、やはり憶測の域は出ない<sup>14</sup>。

とはいえ謁見場所だけは明白である。その「会見はすべてクンツェヴォにあるスターリンの別荘で行われ」、ソ連側からは「つねに V.モロトフおよび中央委員会委員 V.グロゴリヤンが同席した」という<sup>15</sup>。

## 7 会合をめぐる国際環境

この一連の会合には不明な点が多いものの、日本をめぐる緊迫した国際情勢をにらみながらおの会の会談を重ね、綱領を作成したとみるのが自然であろう。核心に手が届かなければ、外堀を埋めながら内実を推すのが定石、会談や綱領原案の実態がはやけているのなら、いくらか遠回りにはなってもその国際情勢を確かめてみる必要はありそうである。当時日本はどのような環境のもとにおかれ、現地の共産主義者はなにを求められていたのか。

まず、ワシントンが対日単独講和の締結を急ぎ、その駒を着実に進めつつあった。1951年3月下旬、米政府代表は極東委員会にてみずからの講和条約案を披露した。当時、米英両国は中国代表権問題などをのぞけば、講和問題をめぐっておおむね意見

の一致をみていた。もとより持ち駒の乏しいモスクワは下手に干渉して失点を重ねるよりは、傍観に徹しながら「単独講和」がほぼ既定路線になった段階で相手の非を全面的に責める機をうかがっていた<sup>16</sup>。と思う。米国の講和案にたいしてソ連側はすぐに回答をあたえず、5月7日になってようやく応答した<sup>16</sup>。

このような諦念にいたるわけだから、駐米ソ連大使館の描く見通しは当然暗く、米国が日本を同盟国として取り込み、それをみずからの軍事基地として利用することがほぼ決定的だと断じて疑わなかった<sup>17</sup>。これは多分に脚色をほどこした情勢分析には違いないが、実情から遠く乖離していると斥けるほどに的外れでもない。

つぎに東側世界にとっても対日政策はそれじたい孤立して存在する問題では毛頭なく、欧州情勢や朝鮮半島の戦局をにらみながら少しでも有利な条件を引き出すという類のものであった。当然ながら、半島の戦況は敵の極東戦略を占うというばかりでなく、こちらの出方を決するうえでも肝要である<sup>18</sup>。

1951年春までに中朝側の部隊は38度線以北に押し戻される。攻勢に転じて優位をねらうのは難しいが、敵に降伏するほど弱体でもない。ならば長期戦に持ち込んでこちらの態勢を立て直し、相手の弱点をしぶとくさぐるというのが正攻法<sup>19</sup>。このころ北京の要人が「経済建設に向けた三年準備、十年計画」をまじめに検討し始めたのも故なしとしない。これは持久戦の教えに忠実な優等生然たる計画である<sup>20</sup>。

ただ、長期にわたる苦闘を強いるわけであるから中共幹部は誇張を交えながら党内、ひいては国内の人びとを鼓舞する必要に迫られていたであろう。4月初旬、周恩来が党内に向けてこう檄を飛ばした。米国を「相手にする以上は、長期闘争を進める準備をしなければならず、戦争の拡大を恐れてはならない。われわれがこの決心をしてはじめて敵に困難を知らしめ撤退させることができる」。「もし朝鮮にて敵を長期戦に引き付けられれば、他の場所で敵は力を弱めねばならない。もし敵が朝鮮から撤退すれば、別の場所で増強することになる。朝鮮にて敵の力を大々的に殲滅してはじめて敵を弱体化させられるし、内部の困難を引き起こすこともできる、これは敵が優勢な軍備でかためている場合、時間を要して

はじめて実現できるから、われわれとしてはむしろ敵が朝鮮にとどまり長期戦をしてくれるほうがありがたい<sup>21</sup>」。

米国が洋の東西を問わず、その軍事同盟網を着々と整備していると思しき情勢下、その米軍を朝鮮半島に釘付けにして全体の勢力を削ぐことにこそ半島における苦闘の真髓があるというわけである。西側主導の対日単独講和路線がもはや覆しがたい局面にいたったのであればなおさら、隣国にて持久戦を堪え忍ぶだけの価値があるということになる。誇張にも映じるこの論法はなにより自身を奮い立たせるための強がりでもあったろう。

その決死の覚悟は4月22日からほぼ一ヶ月かけて毛沢東が着手し、そして失敗した最後の第五次戦役に現れている。その後、38度線をはさんで米中両軍が膠着するという戦局に陥った<sup>22</sup>。それでも中共側はなんら勝機を見いだせないまま最後の冒険に身を投じたわけではあるまい。マッカーサー解任などで不調を来す敵側にもそれなりの弱点があると踏んでのことだろう<sup>23</sup>。

ただ、苦闘を強いたものの戦果が上がらなかったことは確かである。陣営の領袖としてはここで中朝の同志に仁義を立てる必要があったのか、なおも士気を鼓舞する意味もあってか、めずらしく自身の非を認めている。スターリンは「戦闘機 MiG-9 がより優れた英米ジェット戦闘機と伍して戦えるとわれわれロシア人は誤認した」、「いま北朝鮮における空中戦をへてこのことは明々白々だ」と毛沢東に告げ、「この誤りの全責任はわが方、ロシア側にある」ことを率直に認めた。その後、かれは中国にたいして一定の補償措置をとることを約束した<sup>24</sup>。

毛もまた「わが軍の技術的条件が敵側よりもはるかに劣っている」ことを痛感せざるを得えなかった。だから「朝鮮問題は迅速には解決でき」ず、「敵側の力を徐々に削いでいくという段階をへてから問題の最終解決の段階に移る」という「長期戦」の構えをあらためて説いた。「いま敵側は武器の威力が強いはかりか、戦闘意欲もまだ衰えていない」から、こちらは「大規模な殲滅戦を企む」ことなく、「念入りに計画を立て、機会をうかがい、小規模な殲滅戦を数多くしかける」必要があった<sup>25</sup>。

ここからは持久戦の習い、和戦両様の構えをくずさず好機をうかがうことになる。まずは敵方との停



戦交渉に臨むため、6月以降中朝間の事前準備が忙しくなる<sup>26</sup>。つぎに向こう2ヶ月、大胆な軍事行動は控えながらも大規模な反攻準備を重ねることを決した<sup>27</sup>。この二重の姿勢はある受動的態度——停戦交渉を進める用意はあるものの、それをわざわざこちらから提案するのは相手に弱みをさらすことになるから、あくまでも敵方がこれを持ちかけるまで待つという態度——に色濃く投影された<sup>28</sup>。

当時、モスクワは朝鮮戦争の平和的解決を望むと公式にうたえてはいたが、停戦交渉そのものは中朝などの当事者にゆだね、みずから正式に干渉することは避けた<sup>29</sup>。

当事者が停戦談判の席につくのは当然だとしても、毛沢東としてはやはりスターリンにきめ細かい指導を求めた<sup>30</sup>。これには兄弟関係の序列を重んじるという体面上の配慮のほか、最終決定権を領袖にあずけて重責をまねがれようとする下心もあっただろう。だが、陣営の領袖もその下心を見透かしてか、毛のこの懇願をあっさり斥けている<sup>31</sup>。ここでもやはり現地の闘争は自力更生を旨とするというこれまでの鉄則を踏み外すことはなかった。

ここからいよいよ敵側との停戦協議が始まるわけだが結果は不調、その成果だけを問うなら実りの乏しい会談であった。だが、神は些事に宿る。その前後で東側陣営がかかげる極東の対外政治目標にそれなりの変化があったことを見落とすのは惜しい。1950年末あたりには高値をつけていた目標も戦場での後退がたり、翌年7月までには順次値下げを余儀なくされた。たとえ高望みだとしても、当初は朝鮮戦争前夜の現状を回復して半島と台湾から米軍が撤退することをねらっていたほか、対日全面講和についても具体的な戦略目標としてかかっていた。しかし、戦況という冷厳な事実をまえにいずれの目標も優先順位を大幅に下げざるようになった<sup>32</sup>。

7月初旬、中朝側は敵側との交渉にて停船命令を発するほか、38度線をはさんで緩衝地帯を設けることなどを構想するにいたった<sup>33</sup>。当初、半島から米軍を追い払うことを、少なくとも停戦交渉の議題にしようと目論んでいた中朝だが、敵側がこれに難色を示す。戦場で相手に打撃を加えて圧力をかけることができない以上、敵側のかたくなな態度にはこちらが屈するほかなかった。

毛はスターリンに宛てていわく、「全外国軍の朝

鮮撤退問題について敵側がそれを「停戦交渉の」議題に含めることに断固反対している」、「われわれはおそらく朝鮮からの外国軍撤退問題を再検討しなくてはならない」、「現時点でわれわれの軍隊が敵を北朝鮮から追放するのが関の山であり、南朝鮮からの同軍撤退を求めるには力不足である」、「長期戦という条件下、敵側はいつそう大きな損失を被るであろうが、われわれもまた財政をひどく圧迫し、防衛建設の強化が難しくなろう」。自身の非力をこう嘆いたあとで毛は陣営の長兄にうたえた。「長期戦になればしかるべき結果を得るのが難しくなるから、長期的な軍事作戦遂行をつうじて外国軍の撤退問題を解決しようとするよりも、いっそ当該問題を停戦のための必須条件として提起しないほうがよい」。外国軍の半島撤兵問題は「台湾からの米軍撤退問題、対日単独講和条約および日本の非軍事化問題と同じく」停戦後の審議にゆだねるほかない<sup>34</sup>。

もはや対日全面講和や朝鮮・台湾からの米軍撤退は優先事項ではなく、当面は38度線を境にして彼我の線引きをはかるというのがかろうじて目標として生き残った<sup>35</sup>。建国まもない北京にとっては維持するだけでも荷の重い戦線であった<sup>36</sup>。

## 8 中国の経験と日印両党

日共幹部がスターリンとの会談を断続的に重ねていたのはまさにこのような時節であった。半島の戦場で最後の賭け——第五次戦役——に出るもそれに躰くあたりでおそらく初回の会合がもたれ、その後は和戦両様の構えで敵側としぶとく渡り合っているさなかに日中ソ三党の会談が開かれたと思しい。

この事情から推せば、共産世界の領袖が対日講和問題などで現地共産主義者に過度の期待をかけていたと信じるだけの根拠に乏しい。たとえかれが日本の同志に強硬路線を説いていたとしても、無謀な冒険によって事態を覆せると踏んだわけではあるまい。ただ短期的には大勢が変わらないとしても、朝鮮戦争を後方で支える在日米軍の動きを少しでも鈍らせ、日本国内の世論を反米闘争に駆り立てるなどの余地は十分にあったろうし、その役割を現地共産主義者に求めたとしても驚くにあたらない。

そのためには日共の党内亀裂をすぐにでも修繕することが正攻法であり、統一した司令塔をもって広く大衆を動員することは肝要であったろう。当時、

主流派幹部が断続的に自己批判の書を認めた一因はこのあたりにもあったといえる（第5稿参照）。

当時、アジア諸国が中共の経験に範をとることは推奨されていたが、それは必ずしも冒険的な武闘路線にのみ身を投じるよう急いたものとは限らない（第2稿参照）。中国とは闘争の条件が著しく異なるインドの同志が毛沢東仕込みの農村武闘路線に走ろうとするのをつよく戒め、まずは現地の条件に合わせて広く隊列を組むよう説いたのはほかならぬスターリン本人である（第5稿参照）。北京自身もまたみずからの経験が周辺諸国にとって有意義だと自負しながらも<sup>37</sup>、植民地・半植民地ではない日印にたいしてはその経験をどのように活かすべきか、明確な態度を決めかねていたようにも見受けられる。

ちょうど日共の新綱領が準備されていたと思しきころ、中共中央宣伝部長であった陸定一の論稿がコミンフォルム機関紙に掲載されている。かれは「資本主義諸国における革命の古典的型は十月革命」だが、「植民地的反植民地的諸国における革命の古典的型は中国革命」である、「その経験はこれら諸国にとり計り知れない意義を持っている」と喝破した。なによりも「中国人民革命の勝利は植民地的半植民地的諸国の労働者階級と広汎な人民大衆に、まずもってアジア諸国の十億の民に、彼らの解放闘争における勝利の可能性を示した」とする。

ただ、そのアジア諸国を具体的に列挙する件で、勇ましい語調にもわずかな躊躇がみられる。いわく、「越南、ビルマ、インドネシア、マレー、フィリピンのような植民地的半植民地的諸国において人民は反帝人民解放戦争を行っており、インド、日本、その他の諸国では民族解放運動が成長している。中国の例と中国の経験はこれら諸国民の闘争意欲を強化し、勝利に対する彼らの確信を固めた」<sup>38</sup>。

総体としては日印ふくめてひろくアジア諸国にとって中国の経験が有意義だと読める文章である。だが、本来は植民地・半植民地の模範として中共の経験を称揚すべきところに、やや無理を承知でその範疇に必ずしも属さない日印までも強引にひとつの枠内——ひろく「解放」のための闘争——におさめようとしたという印象をぬぐい取れない。日印まで含みこもうとする野心がかえってその特異さを際立たせているようにもみえる。

もちろん印共自身は中国の経験に多大な敬意をは

らい、綱領草案ではつぎのように謳っている。「偉大なる中国の人民民主主義にひきいられるアジア諸民族は、現在、帝国主義からの解放のために闘っている。インドはアジアの最後にして最大の半植民地隷属国であり、圧制者どもはこの国をますます掠奪、搾取しているのである」。また議会外の闘争にも重点をおくことを示唆して、「憲法による選挙だけで国内の地主、資本家の支配や国家生活に対する帝国主義権力を終熄せしめることができると言明することは人民をあざむくことである」、「選挙権は抑圧された大衆の真の意志や真の利益をあらわすことはできない」ともうたえている。

中国の境遇に合わせるかのように自国の現状を「半植民地隷属国」と定める印共ではあるが、それでもなお農村を主舞台にした武闘路線をかかげるわけではなく、あくまでも広範な隊列づくりを核心におく。いわく、「新しい人民民主主義政府は国内のすべての民主的、反封建的、反帝国主義的勢力の連合を基礎として樹立されるものである」。「数百万の勤労者、労働者階級、農民、勤労インテリゲンチヤ、中層階級ならびに国家の自由と豊かな生活建設をのぞんでいる民族ブルジョアジーにたいし統一民主主義戦線に結集するようよびかける」<sup>39</sup>。

さて、肝心の日共である。当時は同党もまた四全協「軍事方針」に明らかなように、「日本は米帝国主義の全一支配の下に、植民地化されるに至った」と診断し、みずから中国の経験を活かせる境遇にあると宣言していたようにも見まがう。だが、解放軍ひとつ持たず、農村を主舞台にした武闘路線を全面化するわけにもいかない現状に合わせて、やや自制的な「軍事方針」を掲げるにとどめた（第4-5稿参照）。

印共幹部にくどくど講釈したスターリンの立場から推せば、かれがこれまた中国とまるで条件の異なる日本の同志を相手に毛沢東仕込みの農村武闘路線をつよく推奨したと信じるのは憚られる。すでに反米闘争の覚悟を固め、「軍事方針」まで練った日共であるから、スターリンとしてはそのこと自体をあらためて訓示する必要はなかっただろうし、むしろその士気をいっそう高めるために日本の同志にあれこれ説法し、綱領の作成に介入したのではないか。

細部までは照らせないが、一連の会談をふり返りながらその実情に迫ってみたい。

## 9 初回の会合

まずは徳田ら主流派とスターリンとの初会合である。反主流派の袴田はモスクワの滞在記を残しているが、そのかれも現地にて没交渉であった徳田ら同胞の動静については知る由もなく、スターリンとの会合はさいごの一回を除いてほかに確たる証言に乏しい。初回から第三回までの面会についてはやはりソ連側の通訳が残した手記にたよるほかない。

その初回については記憶も鮮明であり、席上議論が紛糾する前夜であったから気兼ねなく伝えてよいということか、いくらか具体的に情景を語っている。

戦勝記念日〔5月8日〕の数日後、気の滅入するような待機が終わった。V. グリゴリヤンから別荘に呼び出しがあり、かれは日本人同志が2～3時間後にソ連共産党指導部と面会する用意はあるかと尋ねてきた。野坂はかれらがいつでも面会する用意はあるが、袴田は含めないと答えた。わたしの理解するところ、野坂とその同志たちは会談で論争が始まり、袴田がかれらを批判するような指摘をして、自身の集団の立場を利するような議論をするのではないかと恐れたのである。<sup>40</sup>

この証言は事実を伝えようとする姿勢を装いながらも、それ以上のことを訴えようとする毒気をすくなく含んでいる。反主流派を排除しようとする野坂ら主流派の器量の乏しさを呪うこの表現には、それを放置するだけの余地を残したクレムリンの姿勢にたいする疑念が欠けている。袴田に声をかけるかどうかという重大事をもっぱら主流派の裁量にゆだねたという事実そのものにはあくまで寡黙だからである。これもよくいえば過剰な介入を控えようとする紳士的な態度ということになるだろうが、当のスターリンは最初無然とした様子で出迎えたらしい。

通訳いわく、「われわれは公用車をあてがわれ、クンツェヴォにあるスターリンの別荘に到着した。スターリンは挨拶もせず、握手だけすると客人をかなり冷たくあしらった。紹介が終わると、すぐに実務的会談に入った」。そっけない態度というだけならまだしも、主人は周到な用意もそこそこに話を始めたようである。つづけていわく、「スターリンは最初日共第4回〔全国〕協議会の決議冊子をわたしのまえ

で開き、段落を指さして、わたしにそれを訳すよう言いつけた。文面は非常事態にさいして中央委員会が大会の招集がなくとも党を指導できるという内容であった」<sup>41</sup>。

その後、会話が交わされた。党内分裂が生じて久しいにもかかわらず、印共の同志よりも来訪が遅れ、しかも対立両派一対で挨拶にも来ない日本からの客人をいくらか訝ったのか、「スターリンはなぜ志賀が来なかったのかと尋ねた」らしい。それに答えて「徳田は志賀の家族が深刻な状況にあり、かれの代わりにかれの支持者である袴田が来た」と告げた。ならばその袴田がここに不在であるのはなぜかとスターリンが詰問してもよさそうなものであるが、通訳の述懐にそのようなくどりはなく、かれはここで「君たちはもっと早く来たかったのではないか」、「何かが君たちを妨害したのか」とだけ問うたようである。言葉はいたって簡明だが、その答えや態度如何で相手を値踏みするような含みのある質問である。

徳田らはその含みを十分に心得ていたのか、「客人は多くを語らなかった」というが、「やがて西沢（代表団のなかでは最年少）がこう切り出した」らしい。「われわれはスターリン同志から党内状況についてお叱りを受けることを恐れていたが、来なければならない状況になった」。これに「スターリンは笑うと、不服そうに述べた。『ほらほら、そんなことだろうと思った。インド〔共産〕党は崩れたが、君たちのところもまた何かがあった』」<sup>42</sup>。

クレムリンの領袖からみれば日印両党の内紛は好一対であったが、難局に陥っていた当事者は内輪もめに没頭していて近視眼的であったということか、「わたしはインドで起こっていることを知らない」と徳田は返した。実情はともかくも、この告白は共産世界の中核と辺境、両者のながめる景色が好対照であることを物語るばかりでなく、事情に疎い後者が世界を睥睨する前者にむけて指南を請うという非対称な関係をどこか暗示している。

そこで徳田は「日共中央委員会には主要な指導部勢力に反対する集団がつくられ、党分裂に終わらねない状況にある」ことを認め、先方に仲裁を求めた。いわく、このような「事態の処理に助力を求めたいと思い、モスクワに来た」<sup>43</sup>。

この懇願にたいしてスターリンが見せた態度は印共幹部に見せたものと大差なかったようである。通



訳の記憶によれば、スターリンいわく「われわれは判事ではないから、いずれの立場が正しく、また誤っているかを決めることはない。これについては君たち自身、君たちの党が決めねばならないことだ」。この言を補強するようにして通訳は「ただちにこう指摘しておかねばならない。スターリンのこの発言のあと、日共中央委員会の意見対立について会談ではこれ以上触れられることも、審議されることもなかった」と述懐し、主人が他党への不用意な介入を避けたことをことさらに印象付けようとする<sup>44</sup>。

スターリンは印共幹部にたいして指示ではなく助言を与えるにすぎないと断りながらも、その実相手の戦術を執拗に責め立てたから（第5稿参照）、上記通訳の述懐を字義通りに受け入れることはどこか躊躇される。ただ、周到な準備を重ねてこの会談に臨んだという印象をまるで与えないスターリンのその態度からすれば、かれが初回の会合で深入りを避けたとしても不思議はない。

実際、かれはこのとき自党の経験を披露することで助言に代えたいらしい。通訳によれば、スターリンいわく、「ただ、君たちがわれわれの助言を必要とするのであれば、われわれはこのような場合、われわれ党内でどのように問題を解決したのかをお話することはできよう」。たとえば、「レーニン具体的な党行動綱領を作成するよう求め、それに基づいて同志たちを団結させた」。以上の発言は「君たちも日本の現況を勘案しながらそのような文書作成を検討すべきだ」というスターリンの「助言」だったと通訳は推察する<sup>45</sup>。

徳田としてもこれに異論はなかったとみえ、「それはよい考えだ」、「ただちにモスクワでこれ[綱領作成]を考える」と応じた。事程左様に会談は温和に進んだという<sup>46</sup>。

この席に袴田が不在であることは特段紛糾の種にならなかったようである。かりにそうだとすれば、それはモスクワも北京もすでに徳田ら主流派の指導体制を容認してきたということに加え、その主流派幹部が本国ですでに自己批判を始めていたという重い前提があったからかもしれない（第3、5稿参照）。

## 10 第二回会合

通訳アドイルハエフの回想によれば、この「第一回会合のあと、日本人同志3人[徳田、野坂、西沢]

が袴田を入れずに綱領文書の作成にあたった」という<sup>47</sup>。かれらはつぎにスターリンに接見するまでに素案をつくり、先方に提出していたようだが、その時期については判然としない。仲介役の王稼祥がクレムリンの要人と会談した日付が6月6日であったというから、そのあたりまでには徳田らの綱領案が提出されていたと思われる。

いずれにせよ、「このとき[第二回会合]までに日共指導者たちはみずからの綱領文書草案を作成していた。当該文書はロシア語に訳され、スターリンに届けられた」という<sup>48</sup>。

第二回の会合はスターリン、モロトフ、グリゴリヤン、マレンコフと徳田ら日共幹部が列席したようである。その「会談の冒頭」、スターリンはさっそく綱領原案にふれ、「準備された文書を注意ぶかく読んだが、そこには一般的な立場がたくさん書かれているため、もっと具体的にしたほうがよいという印象を受けた」と総評した。そのうえで、つぎのように助言したという。「そう、『革命について』といった表題も新聞の見出しのようだ。国内の現状について、また人民をもっとも懸念させていることはなにか、はたまた党が最優先課題にすべきことはなにかについて、君たちはほかの誰よりもよく知っている。よって形式・内容のいずれの面においても、綱領は当面の行動綱領という性格をもたねばならない」。

徳田はこれに「同意」したうえで、相手の望む解答を一言違えず返す優等生のごとく、自党の使命をこう表現した。「現在日共にとって最重要の任務はすでに六年続く米国占領にたいする闘争、そして占領者と協力し、独占企業の利益を擁護し、日本人民を抑圧している日本反動政府にたいする闘争である」。

それが分かっているなら、その精神を十分に活かした綱領がなぜ作れないのかと不満を抱いたかのように、スターリンはこう応じた。「もし日本人同志が米占領との闘争を党の主要課題だと考えるのであれば、そのことも綱領文書に反映しなければならない。占領者にとって耐えがたい状況をいたるところでつくることが不可欠であるが、そのためには愛国勢力の統一戦線づくりを考えねばならない」。その後、かれは「文書草案をもう少し練よう日本人同志に助言した」という<sup>49</sup>。

この回想に拠るかぎり、このときのスターリンの態

度は二重に印象的である。まず、闘争路線そのものについて厳しい訓示を垂れたのではなく、日共の定めた路線——もちろん中ソ両党の批判に応じながら定めたもの——を前提にして、文面を工夫せよとだけ注文したように読める。つぎに反米闘争の重点を武闘ではなく、あくまでも統一戦線づくりにおいたと思しい。もちろん、これは「50年問題」にたいするクレムリンの免責をねらう方便とも映じるが、当時は北京、コミンフォルムの各論評ともこれと類似の論法に拠っていた（第2稿参照）。

さて、つぎの会合までにスターリンは綱領を用意したようである。ソ連側通訳によれば、「第二回面会から第三回面会までのあいだ、スターリンは日本の共産主義者の書いたものを念頭において綱領文書案を準備した」という。「その日本語訳は検討用に客人〔日共幹部のことか〕に渡されたほか、ロシア語文面の複写がモスクワ駐在中華人民共和国大使王稼祥に渡された」らしい。ちなみのこのとき「王は通訳リチュリ〔李初梨のことか〕を同伴して第三回会合に招待された」という<sup>50</sup>。

なお、この綱領が作成されるさい、スターリンの見解に拠りながらマレンコフがまとめたという伝聞もあるが、真偽のほどは定かではない<sup>51</sup>。

## 11 第三回会合 ―二重の制約

当然ながら、共産世界の領袖がつくりあげた綱領を検討する場が三度目の会合であった。しかし、検討とは形式ばかりで、実質的にはそこにふたつの制約があったというべきであろう。

まず、反主流派の袴田は招請されておらず、主流派の徳田だけがスターリンに直面した。党内内紛の仲介というにはほど遠い無作法である。ただ、主流派の現指導体制に正当性を与えてきたクレムリンの立場からすれば、原案の検討段階では当然の対応ということだったのかもしれない。つぎに、陣営内の最高権威が物した草案に異見をとることは心理的にもかなり難しかったであろう。

実際、アドイルハエフの述懐によれば、「準備された文書草案は逐条ごとに検討されることも、全体的に審議されることもなかった」という。とはいえ、なにも意見がでなかったわけでもないらしい。

たとえば、日ソ両党のあいだを取り持つ「王稼祥はある箇所の『改革』という言葉をもっと『革命的』

なものに代えるよう助言した」という。「モロトフは提案されている文脈のなかでは、それが『日和見主義的色彩』を帯びると述べ、かれ〔王〕の意見を支持した」らしい。すると「スターリンも提案に同意し、『そう、王稼祥は正しい、正さねばならない』と述べた」という。

徳田らも端からすべてを呑みこんだわけではないらしく、あくまでも控えめではあるが、修正できる余地をいくらか探ったようである。ソ連側通訳がこのときの様子をつぎのように伝えている。

しかし、日本人同志はこう述べた。この状態で当該文書を受け入れることはできない。みなこれが驚いた。「なぜか?」と訊くスターリンの質問にたいして徳田はこう答えた。文書にはすべて正しいことが述べられているが、これが「われわれの作品だと信じてもらえない」ような熟達した言葉および文体で書かれているからである。

内容にはいっさい立ち入らず、表現だけを自分たちの調子に合わせたいというこの自制的な申し入れにたいして、異邦の同志に指示ではなく助言を与えるに過ぎないと断じたはずの本人がこのときはきっぱりとそれを遮っている。アドイルハエフいわく、

そのときスターリンはこう述べた。「もし君たちが文書の内容に同意するのなら、いっさい変更しないでそのままにすることだ。問題は言葉ではなく、表現されている意味にある」。これはつまり、日本人同志が不可欠だと考えるみずからの言葉によって文書を表現せよと提案されたということである（かれらはすぐにそれをモスクワで仕上げた）。<sup>52</sup>

往年の述懐はこの件でやや意図的にあいまいな表現をほどこしている。前半はスターリンの言であるが、後半はそれを伝える通訳その人の解釈として読める。後者を信用するのであれば、内容の変更は許されないにしても日本の同志にはそれを独自の調子で表現する余地は残されていることになる。しかし、前者の口調はあくまでも厳しく、その余地を奪いかねないほどの凄みで迫っている。ささいな差異にもみえるが、陣営の領袖が異邦の同志にあたえる威圧の性格はいくらか異なるものである。



実情は判然としないが、スターリン自身が綱領の邦訳原文そのものを直接かつ正確に判読・校正できないことを考えると、かれの真意がどうであれ、結果的には日本側にもごく限られた範囲で表現を調整する余地が残されていたことになる<sup>53</sup>。

ただ異論が許されなかったことに変わりはなく、そうなると会合はとたんに終盤へと近づく。「会談の最後にスターリンは袴田が綱領文書に目を通すこと、そして最後の面会で具体的な審議をするためにかれを招待することを提案した」という<sup>54</sup>。

この件は一言一句を正確に記録したものとは思われないが、おおむねそのような主旨を語ったということであれば、このことは期せずして別のことをも語っている。次回、反主流派の袴田を会合に呼んで「審議」するといっているが、「最後の面会」になることを端から決めてかかっている。どうやら最高権威は袴田がどのような態度に出ようが長期戦になるような異論や紛糾を封じることなどたやすいと踏んでいたようである。後年、伊藤律はこのあたりの事情について徳田本人から聞いたのか、こう語っている。「袴田をどうするかについては事前にスターリンと徳田は話し合っていて、袴田に批判があるようなら言わせようということになっていた」<sup>55</sup>。

さて、新綱領を作成するという実質的な作業はここであらかた片づいたことになる。現在、日共中央はこの一連の過程についてつぎのように断じている。

スターリンは、この会議〔何回目の会合かは不明〕で、みずから筆をいれた「日本共産党の当面の要求——あたらしい綱領」（「五一年文書」）をつくり、「日本の解放と民主的変革を、平和の手段によって達成しようとするのはまちがいである」と結論づけました。のちに「五全協」で決定された「軍事方針」も、この会議で準備されたものでした。

56

詳細を跡づける証拠に欠ける以上、この真偽を裁定することは躊躇われるが、状況からみておおむねそのごとくであったとしても不自然ではない<sup>57</sup>。ただ、形式や表現の異同はともかくも「軍事方針」の基礎になるものがこれ以前に本国で用意されていたという事実を忘れてモスクワ会談の重さだけを力説するならば偏りは免れまい。

いずれにせよ、徳田を首班とする指導体制のもとで新綱領の方向性がまとまったと思しきこの時期、クレムリンはかれらに資金提供をすることを決定している。6月13日付の全連邦共産党中央委員会政治局決議につぎのような一節がある。

#### 198. — 対外政策委員会の問題

1. 日本共産党中央委員会（徳田同志）から提起された要請に関して、日本に10万米ドル規模の財政援助を与えることが妥当だと考える。
2. ソ連財務省（ズヴェリエフ同志）にたいしてグリゴリヤン同志に特別目的として10万米ドルを至急するよう義務を負わせる。
3. 日本共産党への資金譲渡は情報委員会（ゾーリン同志）に委任する。<sup>58</sup>

この案件、実際に中国同志に託した資金が日共代表の手に渡ったことを東京にいたゾーリン自身が9月7日付で報告していたという<sup>59</sup>。

#### 12 さいごの会合① — 開催日をめぐって

ほぼ大勢が決したところで袴田が会合に招請されたことを思えば、さいしょから劣勢のかれに潮目を変えるだけの勝機があったとはとても考えられない。先方が早々に会合を切り上げる算段でいたのだからなおさらである。

スターリンは決着を急いだようにみえるが、いつその会合をもったのかを特定するのは思いのほか難しい<sup>60</sup>。

袴田本人はそれを8月と回想する<sup>61</sup>。一方、前述のとおり王稼祥の年譜では中ソ両党間の第三、四回の会合は同日（6月6日）に举行されている。王稼祥本人は6月30日までには北京に帰還しているから8月に袴田を交えた会合が举行されていたのなら、王がそれに出席することは難しい<sup>62</sup>。袴田の回想ではさいごの会合に王稼祥も列席したことが記されているため、下斗米は第四回会談が6月6日夜にもたれたものと推断している<sup>63</sup>。

ところで王稼祥の年譜にみえる第一～四回会合はいずれも中ソ両党間で協議したことを伝えるのみで、日共代表がその場にいたのかどうかについてはあえて黙している。通訳アドイルハエフは第四回会合の日程については特定していないものの、列席者につ

いては丁寧に記載しており、すくなくとも会談後に用意された食事に王稼祥は参列していたようである<sup>64</sup>。また袴田の回想に登場する王稼祥は「この間[会談終了時まで]」、「ひとことも発言しなかった」というからあくまでわき役に徹していたのだろうが、本人がその場にいたという根拠にはなるだろう<sup>65</sup>。

さらにいえば、かりに日ソ両党の仲介役である王稼祥がその終盤の重大任務をはたさずに帰京したとすれば、それこそ奇異である。また米英による対日単独講和成立が迫っていることを考えれば、決着を急ぐスターリンの焦燥も思い半ばに過ぐ。したがって、さいごの会合が6月6日の夜にもたれ、王稼祥がそこに列席した可能性は十分にある<sup>66</sup>。だが、これとて憶測の域は出ず、それを断定できるだけの証拠に欠けるというのが現状であろう。

### 13 さいごの会合② ―舞台設定をめぐる―

正確な日程はともかくも、さいごの会合についてはソ連側通訳のほか、袴田がそれなりに詳細を伝えている。とくに後者にとっては突如呼び出しを受けて準備もそこそこに会議の場に引っ張り出されたとあって終止相手の無作法と強権を呪うような述懐である。よく知られた回想部分であるが、事の性質上、不可欠な部分であるからすこし立ち入っておく。

袴田いわく、「ソ連の党国際部の副部長が、突然、私の宿舎にやってきた」が、かれは「それまでにあったことのない男で、やにわに私に一つの文書を突きつけ」た。先方は「『これを承認するかどうかいいほしい』と迫」り、「『承認するなら、これからスターリンのところと一緒にいこう』ともいった。それまでとは打って変わって高圧的な態度である」。その文書というのは「のちに「五一年綱領」（「日本共産党の当面の要求―新しい綱領」）となるものであった」。

袴田の不服は正当な手続きをないがしろにする相手の独善に向けられている。いわく、「私の考えは、すでにソ連の党に提出してある」が、「そんなことはおかまいなし」、「徳田たちと議論させ、それで決めるという手続きもとっていない。一方的に、ソ連の党が、徳田たちや中国の党とだけ話し合っただけで決めたものである」。「『分派』代表の意見など入れる必要がない、ということだったのだろう」<sup>67</sup>。

恨み節ではあるが、事の次第はおおむねそのごと

くであったと思しい。かれがいわゆる「国際派」代表だったかどうかについては同派幹部から異説も出ているが（第3稿参照）、このときかれ以外の仲間を当地に送り込むことさえできなかったものがこの点ばかり非難するのはみずからの手段の乏しさをわきまえない児戯に等しい責任転嫁であろう。

さて、袴田からみれば「当時のスターリンは、国際共産主義運動のなかで、あまりにも大きな存在であった」から「結局は、心にもなく[綱領承認の是非について]『イエス』といわなければならない状態」にあり、「しぶしぶ承諾の返事をした」という<sup>68</sup>。後年の自己弁護で脚色された言ではあろうが、先方の都合で事態の大半が推移したこと自体は争えない。ちなみに後年、安斎庫治は当時の袴田が「極左冒険的」な路線に反対していたとかれを弁護している<sup>69</sup>。

急かたてられるようにして袴田がスターリンの別荘に向かったのは午後9時近く、案内された広間は調度品も少なく、思いのほか質素だったらしい<sup>70</sup>。

その「大広間」にはすでに「当時のソ連の党・政府の最高首脳」が列席していたというから殺風景な内装とは好対照の大舞台。首相にして党書記長のスターリン、対外政策を担当するモロトフ、党機構を掌握するマレンコフ、内務省・国家保安省いずれをも抑え秘密警察の黒幕たるベリヤといった陣容がそこに控えていたらしい。スターリンが一番奥に陣取り、マレンコフ、ベリヤ、モロトフの順に着席していたというが、「これは明らかに、スターリンの後継者の最短距離にマレンコフがいることを示している」というのが袴田後年の記である。

不承不承とはいいいながら、最高権威に謁見したかれは「スターリンに会えたことに感激し、緊張もした」とやや率直に認めている。

その場には同胞も先客として控えていた。袴田によれば、「スターリンと向かい合う形で徳田が座り、その隣に野坂、西沢と続き（野坂と西沢の順は逆だったかもしれぬ）、そして私。私の左隣に、中国の党国際部長・王稼祥が座った。通訳は、スターリンと徳田の間に腰掛けた」という<sup>71</sup>。

通訳アドイルハエフの記憶では日本側の出席者については袴田の回想と齟齬はないが、「ソビエト側は[スターリン以外に]モロトフとグリゴリヤンが列席したとのみ記しており、その陣容には一部異同があ

る。ただ、「会談終了後、スターリンは日本人客のために食事会を用意し、モロトフ、マレンコフ、ベリヤ、グリゴリヤン、王稼祥、そしてわたしの知らないその他同志数人がそこに出席した」と記している<sup>72</sup>。晚餐のまえの会談列席者を正確に特定することは難しいが、袴田の記憶に登場する先方の話者はスターリンとモロトフ、アドイルハエフの場合はもっぱらスターリンであるから、会談そのものの推移を追いかけるのにそれほど支障はない。さらにいえば、食事の席の会話もまた会談の延長であつたらうから両者を区別することそのものが難しく、また本質的な意味も乏しいのかもしれない。

#### 14 さいごの会合③ ―最高権威の荒療治

その会合はどのようなものだったのか。袴田は「両者の話し合いは淡々と進んだ」と記す。夜半にして静寂な森のなか、別荘の大広間では肅々と会議が進められたらしい。かれいわく、

モスクワ近郊のクンツェヴォにあるスターリンの別荘での会談は、夜更けまで続いた。晩飯のあとだったから、食べ物が出なかったし、酒もなかった。一、二度、ロシア独特の背の高いグラスにつがれた紅茶が、男の給仕によって運ばれてきた。別荘をつつむ森は、静まりかえっている。

その「スターリンとの会談が終わったのは、夜の十一時を過ぎていたろうか。早かったようでもあるし、長い時間かかったようでもある」<sup>73</sup>。

さて、話者の発言について袴田とアドイルハエフそれぞれの記憶は細部になればなるほど一致する点が少ない。そこで両者を併用あるいは対照しながら対話を跡づけることにしたい。

まず、1950年1月の「コ論評」に話がおよんだというのが袴田の記憶である。いわく、「最初、スターリンが」「コミンフォルム批判は、それなりの理由があつて出したものである。あれは正しかったと思う」と発言したようだが、「なぜ正しかったかについては何もいわなかった」という。強い叱責でも覚悟していたのか、かれは「おやっと思うほど静かな口調だった」とふりかえる。

この静寂が直後の大立ち回りを予感させるには十分であろう。袴田は「立ち上がって、コミンフォルム

批判後の徳田たちの分裂策謀について、スターリンに訴えた」という。「とかく激しやすい」徳田が「すぐかっとなって卓をたた」くから「日本の党では冷静な討論ができない。とくに問題なのは、マッカーサー指令による六・六追放後、正規に選ばれたわれわれ中央委員の一部を放つたらしにして勝手な行動をしたことである。その結果、党は分裂の状態に陥っている」とこれまでの批判を凝集するように伝えたい。

これを聞いた徳田は「いきなり」「立ち上がって」、「きさま、何をいうか」と怒声で噛みついたというが、袴田はとっさに機転を利かせていわく、「ご覧ください。あなたたちの前でもこんな態度をとるほどだから、日本の政治局会議で、かれがどう振る舞うか見当がつくでしょう」。場は静まりかえったが、かれはあくまでも「徳田たちと意見の違うことを述べた」という。ここで野坂が「袴田君、きみはこの一年間いったい何をしていたのかね。なんにもしていないじゃないか」と詰め寄ったところ、モロトフがこれに口を挟む。「それは、きみたちが袴田同志に仕事をさせなかったからじゃないかな」。ただ「これは一種の不規則発言で、通訳されなかったが、ロシア語のわかる私には意味が読みとれた」という。スターリンはというと「黙ったまま、目の前の紙切れに、あっちの隅こっちの隅とメモをしていた」というのが袴田による往事の再現である<sup>74</sup>。

さすがにここが舞台の見せ場だと心得ているだけあつて、本人の弁にもいきおい熱がこもるが、通訳アドイルハエフはこの一連の攻防をほとんど書き留めていない。限られた紙幅がそうさせたのか、思いのほか印象が薄かったのか、袴田の回想が脚色と演出はなほだしい再現だったのかまでは分からないが、先方の通訳が伝えるべき過去の情景としてそれを選ばなかったことは確かである。

とはいえ、新綱領にたいして袴田がみせた静かな抵抗、かれと徳田ら主流派とのあいだにあるどこか陰湿な敵対関係についてはソ連側の通訳にも印象に残ったものとみえる。

通訳いわく、「貴殿の同志が綱領文書草案を作成したが、貴殿もそれは確認済みのことであろう?」とスターリンに問われた袴田は「その草案を受け取って目を通したが、それを消化する時間はなかった」と答えた。かりに第3回会合と同日にこのさいごの



会合がもたれていたとすれば、この言にはそれほど極端な誇張や強がりは見受けられない。当然、このことは徳田らもよく心得ていただろうが、通訳によれば、このとき「他の日本人会談参加者は袴田にたいして嘲笑的にいじわるく反駁するようにして、かれの言葉に不満を表した」という。

スターリンはさらに続けて「まさか目を通したときに何らかの原則的反対でもあったのかね?」と質した。会場でひとり劣勢に立たされたと思しき袴田はそれでもやすやすと相手に屈したわけではなかったらしい。通訳によれば、「問題は重大でそれを研究するのに時間を要するから、いまのところなにも確定的なことは言えない」と答えていたという<sup>75</sup>。

最高権威に圧倒されるなかでもそれなりに粘りをみせたのだとすれば、袴田自身が後年誇ってもよいようなものだが、じっさいには本人の述懐はこの点にあまり重きをおいていない。いわく、『『五一年綱領』については、いいたいことがたくさんあったが、スターリンに会う前すでに党国際部副部長に対して『イエス』と答えてしまった以上、議論をむしかえすわけにはいかなかった』<sup>76</sup>。結局は正面きって反対せず、しぶしぶ先方の求めに応じてしまったのだから、静かな抵抗も些事にすぎないということか。

じっさい、陣営の領袖は袴田に有無をいわせぬ態度で迫ったとアドイルハエフは述懐する。いわく、

スターリンはこう説明しはじめた。この文書はそう思われるとおり、党の当面の主要任務を確定するものであり、党の団結強化をめざすものである。それなくして党は活動できまい。そのためには二義的問題をめぐる論争や個別の恨みがたとえあろうとも、それを拒む必要がある。つづけてスターリンはこうも話した。「貴殿も労働者、旋盤工である。自身の党活動の団結にはたして反対するともいうのか?」<sup>77</sup>

それじたい反論の難しい正論をふりかざす相手が同胞ならばともかくも、それが異邦の最高権威とくれば、もはや返す言葉もないというところか。「会談で喋るのは、もっぱらスターリンだった。歩きながら、ゆっくりと一語一語、区切るようにして話す。しかし、口調は静かではあったが、決して妥協を許すといっ

たものではなかった」と袴田は振り返る<sup>78</sup>。先方の通訳も「袴田はあきらかに動揺し」、つぎのように答えたと記憶している。

もしスターリン同志が作成された文書を正しいとお考えなのであれば、わたしにとってそれは最上級の説得的な評価であるし、わたしは党団結のために闘い、定められた目的を実現するために闘うことを誓う<sup>79</sup>

「あと知恵」をもってすれば不名誉きわまりない発言であるから、袴田本人がこれを克明に記録するはずもなく、さすがにこの件はアドイルハエフの記憶によるほかない。当時、袴田がこれを真に汚点であると認識したかどうかまでは分らない。たとえ最高権威の眼前であったとしても——むしろそれゆえにこそ——、ときに蛮勇をもって任じる革命家たるものが一片の真意もふくまれない発言をするとは到底思えない。

事実、通訳によれば「スターリンは会談の結果にとっても満足していた」そうであり、「日本人同志はなんとか全員がすぐに喜んだという。かれからすれば、「かれらは和解し、席から立ちあがると握手しあい、自分たちの問題を審議し始めた」。また「この光景をみながらスターリンは『いずれにせよ自党の同志と絶縁するのはよくない』と述べた。これに徳田は『わたしたちは一度たりとも真の党の同志と絶縁したことはない』と答えた」という<sup>80</sup>。

「この会談の最後」、スターリンはこう提案したらしい。「この綱領を日本共産党全体の綱領とするため、東京の中央委員会総会、そして地方党組織で当該文書を審議し、そののち最終的にこれを承認するのがよいだろう」。「客人はこの提案を受け入れた」というから、荒療治きわまりない調停もここでひとまず両者を諫めたことになる<sup>81</sup>。

会談終了後、晚餐会を催したスターリンは「日本[共産党]の政治家がつねに賢明であって、先見の明があったと指摘し、客人のために乾杯の音頭をとった」という。「かれは日本人同志の大いなる成功と健康を願った。つづけて王稼祥、ソビエト同志の健康のために、そして『通訳同志の健康』のためにまで乾杯が行われた。こうしたことはすべて日共指導者との面会の全体的成果にたいしてスターリンが満

足していたことを意味した」とアドイルハエフは結んでいる<sup>82</sup>。

## 15 袴田の自己批判① ―ふたつの圧力

ここで残る謎のひとつは袴田の自己批判書についてである。本人の述懐によれば、さいごの会合で新綱領を押しつけたスターリンがその勢いに乗じてかれに自己批判を迫ったという。いわく、

「袴田同志、日本の同志たちから聞いたところでは、日本の国内で分派闘争が激しく行われているという。これは、よくない。すぐやめなければいけない。今度決まった方針（五一年綱領）で党を統一してほしい。そのためには、袴田同志の自己批判書が必要である。いま書いて、日本の同志たちに送った方がいいと思う」<sup>83</sup>

しかし、アドイルハエフの証言にはこの重大事がないにひとつ記録されていない<sup>84</sup>。袴田の自己批判書は後述のとおり、発表された日付は8月23日である。これまた本人の「あと知恵」による限り、最高権威の圧力に屈して不本意ながら決断を迫られたという代物、過去の汚点には違いない<sup>85</sup>。現在、日共の公式見解でも袴田が「スターリンに屈服し」、「『自己批判』を発表して、徳田、野坂らの分派の側にうつ」ったことを断罪している<sup>86</sup>。

そうだとすれば、袴田本人としては切迫する時間のなかで稚拙な対応を迫られたのだという筋書きを用意しておいたほうが何かと都合であろう。かれがさいごの会合を6月ではなく8月だとあえて断ったのには、このような事情が手伝っていたのかもしれない。8月の会合でスターリンから自己批判を迫られたのなら、それを発表するまでの時間はわずかである。さらにいえば、7月上旬までに日共主流派のおもな自己批判はひととおり出そろっており、8月10日にはコミンフォルムが四全協の分派関連決議を追認している（第5稿参照）。翌月上旬、いよいよサンフランシスコ講和会議が控えているという緊迫した時節、党内結束のために袴田本人が自己批判する機は熟したというものであろう。

かりにさいごの会合が6月上旬であったとすれば、最終発表までそれなりに熟考する余裕があったということになる。本人の真意はともかくも、袴田の述

懐にみえるのは少なくともふたつの圧力——クレムリンからの強要、時間の切迫——にさらされて図らずも下した決断だという舞台設定である。後者の圧力については多くを語るに不都合があるのか暗に示すばかりだが、前者についてはじつに雄弁である。

スターリンと並んで同席していたマレンコフ、ベリヤ、モロトフが、じいっと私を見つめている。徳田球一や野坂参三、西沢隆二たちは、「書くのは当然だ」というような顔をしている。このとき「イエス」という以外に、どういう答えが可能だったろうか。

袴田はさらに予防線を張るようにしていわく、「スターリンの偉大さは、われわれ共産主義者には絶対であった。ロシア革命を成功させ、資本主義諸国の妨害にもかかわらず、社会主義国ソ連を築き上げたこの重々しい事実には、抗しようがなかった」<sup>87</sup>。

たとえ本人がその事情を語らずとも、後年良心的な歴史家であれば登場人物の苦境をおおきた想像し、伝えてくれるというもの、それをみずから雄弁に語ってしまえば、かえってその言を自己弁護で汚し、真意を損ないかねない。既成の権力に果敢に挑むはずの革命家にしては気概の乏しい、言い訳じみた弁解には違いないが、当時日共党内の各派ともに異邦の同志から受ける圧力が——内実が意外なまでに空虚であったとしても——巨大であったことは争えない（第5稿参照）。

ただ、本人の弁解であろうが同派からの叱責であろうが、後年の「あと知恵」ばかり相手にしていたのでは当時本人がおかれていた境遇をかえって見失う恐れがある。ひどく逡巡しながら執筆したと思しい自己批判書であるから、当時から本人にはっきりした意図や自意識があったとは限らない。一方、実際の文面にあらわれているのはあくまでも明瞭な主旨、本人の躊躇はいざ知らず、かれの決断がどこに重点をおいていたのかはその書面に明白である。外向けには非公然の媒体であっても、党内向けに公開した文章には違いないから、不承不承といいながらもそこで表明した最終決断は重大このうえない。

## 16 袴田の自己批判② ―二重の内向き志向

袴田は自己批判書の冒頭、「日本共産党は今日非常に重大な危機に直面している」として、その内実

に迫る。いわく、

この危機はアメリカ帝国主義と日本反動政府の、わが党に加えた弾圧によって作られたというよりも、わが党の内部に全国的規模で分派組織が作られ、党の団結を破り、敵のわが党に対する破壊工作をもっとも容易ならしめる条件を作り、事実上アメリカ帝国主義と日本反動勢力に利益を与える活動がますますロコツになったからである。

「日本はアメリカ帝国主義の植民地になりつつある」と見立てる袴田は、敵が「日本における最も恐るべき勢力であるわが党を完全に破かいするために」「党内の分派を利用している」と断じる。だから分派は「アメリカ帝国主義と日本の反動勢力にとって利益をもたらしている」ということになる<sup>88</sup>。

党内結束の呼びかけを趣旨とする文章であるから、その情勢判断に求められるのは精確な観察というよりは目的にそった脚色、ひいては戯画化であろう。敵方——おもに米国の支配層——が日本を「植民地」化できるほどに圧倒的な力の強さをほこる存在であると断りながらも、目下日共の危機が生じている原因をそこには求めず、もっぱら自党内の分裂に求めるあたり、あえて視野を狭めて身勝手に焦点を絞ろうとする態度である。事実の経過をみる限り、前者あつての后者であるから、これは実感として説得的ではあっても偏重はなはだしい現実の素描ではある。自分たちが敵にとって「最も恐るべき勢力」だと強がっているところなどはその典型である。

とはいえ、党内各勢力を納得させるだけの構えをとらねばならない性格の文章であるから、いくら偏重していたとしても、この観察がご都合主義的で便宜的な修辭にすぎないというは過分、あながち虚言とも言いきれない。むしろ党内の結束を急ぎ回復するためにも十分に説得的だとふんだからこそ訴えた論理であると思しい。

そうだとすれば、異邦の最高権威から強要されたと説くこの文章には、図らずもその核心に空虚がのぞいている。クレムリンから過激な反米闘争を無理強いされたと後年恨み節の袴田であるが、その実、当時の自己批判書には意外なまでに反米闘争にたいする熱意は弱い。もちろん敵の本丸は日本を「植民地」にしている米支配層ということであるが、趣

旨から推してそれは遠方の標的、目下袴田が説く主戦場はあくまでも自党内にある。

かれは「分派組織に影響を与え、その指導に参加したものとして重大な責任を感じている」と殊勝に反省してみせたあと、闘争の決意をあらたにする。

そして私は自分の行動を深く反省した結果、私の分派と関係をもっていた期間の行動は共産党の原則、すなわちレーニン・スターリンの教えと全く両立しないものだという結論に達した。そこで私はこれまでの自己の分派活動を合理化する考えをすて、今後一切の分派と関係を絶つと同時に、その根絶のために闘争することを声明するものである。

さいごに「無条件に、即刻に、一切の分派活動を停止して、いまこそ、この正しい綱領をいささかの保留もなしに実行に移すべきときだ。党の唯一つの指導部のもとに」と結ぶ<sup>89</sup>。

無論、党内の分派批判を旨とする文章であるから反米闘争への言及はいきおい少なくなっているが、敵の本陣をねらうという本来の主目的をあえて遠ざけるような姿勢である。いわく、

党のために、人民のために少しも利益がなく、日本民族の最もにくむべき支配者であるアメリカ帝国主義と日本の反動勢力にとって利益をもたらしている分派は、従って日本民族と日本共産党にとって最もにくむべき存在であることは、もはや明々白々のことである。<sup>90</sup>

主戦場は日米支配層との闘争だと断っているようにみえて、その実、最も熱心に闘う相手を自党内に定めている。後者を制してはじめて前者と闘えるというのがその趣旨であろうが、後者との熱心な闘いに比べると、前者との闘争はどこか切迫感、緊張感に乏しい。力で圧倒する前者と闘うにはまるで勝算が見いだせないから、負け戦に赴くよりはそこから逃れて勤勉に活動できる手ごろな戦場をあえて選んでいるようにも見まがう。

さて、後年の袴田はもっぱらクレムリンから受けた圧力ばかりを呪っているが、当時の自己批判書にあきらかなのはむしろそれ以外の圧力——日米当局から受ける弾圧、それを躲すために迫られた党内結



束—である。なかでもさいごの圧力が突出していたことは印象的でさえある。

このことは袴田、ひいては当時の日共幹部にあまねく宿っていた二重の内向き志向を照らしている。敵の本丸に切り込もうとする姿勢に弱く、もっぱら党内政治に没頭して貴重な時間をいたずらに浪費することに甘んじているような姿勢である。まず異邦の同志が圧力を加えなければ、日共各派の内紛は容易に収まらず、亀裂は放置されていたと思しい。これまでの経緯から推してこのことは明白であろう。つぎにクレムリンが強引に幕引きをはかったところで、袴田は党内結束後の対米闘争を急ぐよりも党内の分派排除に熱を上げるという始末、ここまでくるといよいよ内向き志向は根がふかい<sup>91</sup>。

## 17 内紛の総決算

その内向き志向の総決算ともいうべき事態が祖国の同志に襲いかかった。共産世界の領袖が下した裁定——徳田ら主流派の軍門に降らぬものはひとしく分派だとみなす荒療治——は8月10日、コムンフォルム機関紙掲載の論評に色濃く反映され、8月14日、その内容がモスクワで放送された(第5稿参照)。

当時、いわゆる「国際派」に属したある幹部は「八・一四〔モスクワ放送〕によって内部は文字通りてんやわんやになった」とふり返る。その述懐にしたがえば、内部は三路線に分岐したらしい。まずは「やはりやわわれが根本的に誤っていた、自己批判して〔臨中指導下の党に〕復帰しよう」という立場、つぎに自分たちが現実には分派であり、内外の情勢がこの状態を許さないほど切迫しているから「自己批判出来るところだけ、自己批判して、復帰しよう」とする党員、さいごが「われわれは部分的には間違っている、基本的には正しかった」のだから自己批判はできず、復帰できなくともしかたないというごく少数のものといった具合である<sup>92</sup>。

「国際派」の代表格ともいうべき宮本顕治は8月10日を最後に寡黙になったと思しい(第5稿)。そのかれはいずれの立場だったのか。上記の回想によれば、「彼〔宮本〕自身は、当時の文献をいっさい隠しているので、十分明らかでない」ものの、さいごの立場ではなかったという。本人が「いくら隠しても、自己批判を出したことは明白」だというのがそのひとつの論拠である<sup>93</sup>。

いずれにしても1951年のあいだに「国際派」党員の大部分は臨中率いる党に復帰し、「党は一年有余にわたる分裂・抗争の幕をとじた」<sup>94</sup>。

本国であらたな綱領が採択され、いよいよ過激な闘争が火を噴きはじめた。(続)

[付記] 資料名、引用文はともに旧字体を新字体、片仮名を平仮名、旧仮名遣いを現代仮名遣いに適宜改めた。また本稿は「第四期国際関係史工作坊」(中華人民共和国吉林省長春市、2018年9月8日)に提出した中国語論文(松村史紀「強制与自主之間: 圍繞日共武闘方針の東方陣営内部関係(1949-55年)」)を大幅に加筆修正したうえで邦訳したものである。なお、本稿は科学研究費補助金(研究課題番号16K03508)の研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 袴田(1978: 89)。

<sup>2</sup> 同上: 90。( )内は原文。断りが無い限り以下も同様。

<sup>3</sup> 安斎・竹中(2018: 123)。ただ、インタビューそのものは1986年当時のものであり、すでに袴田の回想録は出版されていたから、後者の述懐が安斎の記憶にいくらか浸透していなかったとも限らない。[ ]内は引用者。断りが無い限り以下も同様。

<sup>4</sup> ここで日中両党の橋渡し役であった安斎庫治が訪ソに同行したのかどうかについては判然としない。当時北京機関にいた藤井冠次によれば、「徳田書記長が例の五一年綱領をスターリンに決定してもらうために、野坂らと一緒にモスクワを訪問した際、安斎さんは中共の国際連絡部長・王稼祥氏と一緒にモスクワへ行き、帰りは北京で毛沢東に綱領を報告するため、通訳として重要な任務を果たしたのである」と書き残している(藤井1995: 68)。

だが、安斎自身はすくなくとも公の場では「ぼくはモスクワへ行かなかったのでよく知りませんが、五一年綱領は、モスクワで作られたことは確かです。あれは、主として徳田さんや野坂さんの意見が反映して作られたものと言えます」と述べ、同行を否定している(安斎座談: 181)。近年公開されたインタビュー(1986年実施)ではこの点、安斎は積極的に否定も肯定もしていない。たとえば、51年綱領は「モスクワで作ったんです。僕は不満だから、ときどき質問という形で出した。例えば権力の問題は、『これは古いものの順序にお書きになりましたか』と、こうやったわけ」。また「五一年綱領というものは日本にすぐに送られましたからね。それで志賀たちによって採択されましたから」。それは「北京を通じて送ったわけ」云々(安斎・竹中2018: 111)。安斎が不満を漏らしたのがモスクワ現地においてだったのか、徳田らの北京帰還後だったのか、この表現だけをもって断ずることは難しい。

モスクワ会談の情景を回顧したロシア側通訳アドルハエフおよび袴田はともに安斎の存在には触れていない(Адырхасв1990; 袴田1978)。後述のとおり、前者は徳田・スターリン会談に立ち会っているが、それ以外は徳田ら主流派幹部の世話にあたっていたから袴田の身辺につい

てはよく知らないと考えられる。袴田自身は、これまた後記のとおり、王稼祥と同一の宿泊先であったという。

かりに安斎が訪ソに同行したとすれば、その役回りはおもに王稼祥を介した通訳等であっただろうから、現地モスクワでかれがアドイルハエフと接する機会がなかったとしても奇異ではない。またアドイルハエフ、袴田の回想によれば、徳田・スターリン会談の席上に安斎のすがたがみられないことから、その頂上会談には出なかったという意味で安斎がモスクワには行っていないと言っているのかも知れない。いずれにしても憶測の域を出るものではない。

<sup>5</sup> 袴田 (1978: 90)。

<sup>6</sup> Адырхасв (1990: 141/ 155). / の右側は邦訳版ページ数を表すが、引用文は基本的に引用者が露文版をもとに訳出したものである。日露両版の表現等に若干の差異がある場合、露語原文に依拠した。以下も断りが無い限り同様。

<sup>7</sup> スターリンとの「会見の合間、日本人同志は治療したり、休養する機会を得た」というが (Там же: 141/ 155)、本国や朝鮮半島の切迫した事態を思えば、陣営内の領袖に謁見するのに時間を持て余したということであろう。

<sup>8</sup> 袴田いわく、「モスクワでの私の宿舎は、中央電信局近くのビルだった。『赤の広場』から歩いてすぐのところ、ゴリキー通りに面していて、五階に王稼祥が泊まり、私には三階が当てられた。それも、一部屋というのではなく、広い部屋が五つもつながったフロアを全部使え、というのである。コックが一人、家政婦、国家保安省の防衛、身の回りの世話してくれる人、と四人くらいの人間が専属で私についていた。スターリンの方針なのか、そのころは、外国の兄弟党からのお客に対しては、いたれりつくせりのサービスぶりだった。私は、この宿舎から、病院に通ったり、ときにはボリショイ劇場にバレエを見に行ったりの日を送った。あるとき、映画を見たいというと、映画リストをもってきて、どれが見たいかいいえという。『これだ』と指さすと、そのフィルムを持ってきて私の部屋で上映してくれた」(袴田 1978: 90-91)。

<sup>9</sup> Адырхасв (1990: 141/ 155)。

<sup>10</sup> 袴田 (1978: 91)

<sup>11</sup> Адырхасв (1990: 140/ 153-154)。

<sup>12</sup> Там же: 141/ 155。

<sup>13</sup> 王年譜: 402 [1951 年 5 月 3 日条]。

<sup>14</sup> 下斗米によれば、「五月一三日付で『日本共産党の綱領改定問題について』という文書がグリゴリヤンからスターリン宛に出された。この文書は同時にマレンコフ、モロトフに加えて、ベリヤとミコヤンにも回覧されている」(下斗米 2011: 238)。この翌日が王稼祥年譜にみえる第二回協議にあたる。後述のアドイルハエフ回想とこれを照らし合わせてみるとこのときに最初の日中ソ三党の会合がもたれた可能性がある。下斗米の推測も同様である (同: 241)。

<sup>15</sup> Адырхасв (1990: 141/ 155)。邦訳版のみクンツェヴォがモスクワ郊外であることを示す補足が加えられている。なお、袴田がこの別荘についてこう書き残している。「そのころ、スターリンは、クレムリンから十五キロくらい離れた西郊のクンツェヴォ (モスクワ市クンツェフスキー区) に住んでいた。『別荘』ということだったが、クレムリン内の執務室のほかは、ほとんどここで生活していて、党や政府の幹部も、なにかといえ別荘に呼ばれて会議をしたり、食事をともにするという状態だったらしい」(袴田 1978: 95)。

<sup>16</sup> 松村 (2018:107-116)

<sup>17</sup> 1951 年 3 月、大使館の作成した報告にいわく、「昨年、米国は侵略的な軍事・政治同盟を組織するという自身の政策を積極的に継続した」、「極東においてこの政策は、日本の軍需産業能力の復活ならびに再軍備という政策の強行によって特徴づけられるものであったが、その目的は同国を極東における米帝国主義の主要基地に変えることにある」(Выписка из политического отчета посольства СССР в США за 1950-й год: Политика США в отношении СССР и стран народной демократии, Составлено в марте 1951 г. Сов. секретно [CAO, no.100: 304-305])。

その後、朝鮮戦争での失態を理由にマッカーサーが解任されると駐米ソ連大使は「現在、米国政府は極東にて戦争拡大を望んでいない」、かれらは「全般的戦略計画においてアジアではなく欧州を最優先すべきだと考えている」、「米国と同盟諸国間の対立激化」もみられると観察する。ただ、「米国の極東政策失敗とマッカーサーの退役によって、米国は対日単独講和条約および日本との軍事協定それぞれの締結促進、そして太平洋条約〔アジア版 NATO を想定した呼称か〕の樹立促進にも着手した」と判断し、対日政策の既定路線が動かしがたいことをあらためて確認している (Политическое письмо А. С. Панюшкина А. Я. Вышинскому, 5 мая 1951 г. [CAO, no.111: 344-345])。

<sup>18</sup> 当時ソ連が対日・対独政策をバラレルに展開していた点については松村 (2018) で論じた。

<sup>19</sup> 2 月下旬、戦況をにらみながら周恩来は「敵の大部分は消滅されないし、朝鮮を撤退することもないだろう、これらの敵を消滅させたいのなら時間が必要だ。よって朝鮮戦争は長期化する可能性があり、わが方は少なくとも二年の準備はなさねばならない」と毛沢東らに伝えていた(周年譜、上: 133-134 [1951 年 2 月 26 日条])。

<sup>20</sup> 3 月 3 日、周恩来は「工業会議、財政会議、その他専門会議出席代表向け」に「目下の情勢とわれらの活動」と題する報告を認めた。その要旨にいわく、「朝鮮戦争は長期にわたって曲折を経るものであるが、今日の勝利は米帝国主義が虚勢を張ってひとを脅かすものだ」と暴露されたことを証明している。われらが勝利しているときにも注意しなければならない、われわれが多くの困難を克服したとか、立て続けに勝利が得られたとか、帝国主義を朝鮮から順調に追い出すことができるなどと考えてはならない。短期的には決着のつかない勝負ということであろう。つづけていわく、「『経済建設に向けた三年準備、十年計画』は党の全体的方針である。われら各部門の業務はこの全体的方針と歩調を合わせねばならない。われらは戦争を進めると同時に、経済回復、建設準備の活動を進めることができる」(『目前形勢和我們的工作』報告提綱 1951 年 3 月 [周文稿 -4: 191])。ここには持久戦を後方で支えるためにも建設事業に勤しむという構えがうかがえる。

<sup>21</sup> 「『目前時局和我們的任務』報告提綱」1951 年 4 月 [同月 2 日、周恩来が中国共産党第一回全国組織工作会议にて行った報告のレジュメ] (周文稿 4: 290-291、295 [注 1])。

<sup>22</sup> 詳細は和田 ([2002] 2012: 293-294)。

<sup>23</sup> 当時、劉少奇はロシチン駐華大使につぎのように語り、米国、蒋介石ともに守勢に立たされていると見ていた。いわく、「米国人には十分にしっかりした防衛力がなく、そのために中国部隊がうまく進軍している。ただ、別の見



- 方もできよう、中国部隊が打撃を加えようとしたとたん、米国人は深刻な戦闘に巻き込まれるのを恐れ、いま機械・兵器をもって急いで南下している」。また「蒋介石軍による大陸上陸の可能性」についていわく、「米国人、さらには国民党員自身がこの問題で大騒ぎしているものの、蒋介石がこのような冒険をすることはおそらくないだろう。ただ、蒋介石軍が大陸に上陸するのなら好都合だ。我々としては、同軍に深刻な打撃を加えられるし、そのなかの大部分はあっさりとなが方につくだろう」(Запись беседы Н. В. Рошина с Лю Шао-Цзи, 25 апреля 1951 г. КСО -9: 2075)。その他、駐米ソ連大使館の観察については注 17 も参照。
- <sup>24</sup> この誤りを改めないと「中国防空に損害を与えかねない」と案じたスターリンは「われわれの負担で、つまり中国側には無償で MiG-9 を MiG-15 に取り換える」ことを約束した。かれにとってこの処置は「わが誤りを一掃する義務」でもあり、「同盟国中国の防衛強化という目的に奉じる」行為でもあった(Письмо И. В. Сталина Мао Цзэдуну, 26 мая 1951 г. [КНР, но.39: 90-91])。
- <sup>25</sup> 毛沢東からスターリン宛電報(毛年譜 -1: 355 [1951 年 6 月 3 日条])。その後も毛はスターリンに宛てこう認めた。「わが軍は朝鮮における戦闘 8 ヶ月を経て、敵方とわが方の軍備に歴然たる差があり、わが軍の軍備改善を急ぐ必要性を痛感している。すでに高岡同志から貴方にたいして 60 個師の軍備を要求し、承諾を得ている。これは朝鮮戦場におけるわが軍の今年の最小限の要求である」(同前: 361 [1951 年 6 月 21 日条])。
- <sup>26</sup> 6 月 3 日、毛は金日成と会談して「来るべき朝鮮停戦交渉の方針と方案について協議した」(毛年譜 -1: 355-356 [1951 年 6 月 3 日条])。
- <sup>27</sup> 毛沢東は戦場で指揮を執る彭徳懷にたいし、こう告げた。「金日成同志とのあいだで話がまとまり、目下 2 ヶ月は大がかりな反攻戦役は進めず、8 月に勝算のある着実な反攻を一度進める準備をすることになった」(「六七両月不進行大的反攻戦役」1951 年 6 月 11 日 [毛軍事文稿 - 上: 502])。
- <sup>28</sup> 毛沢東はこの問題について金日成にこう告げている。「停戦談判をどのように提起するかという問題について、われわれ自身がこの問題を提起することは朝鮮と中国にとって不適当だとわれわれは考える、なぜならここ 2 ヶ月、朝鮮軍と中国志願軍はいずれも防御姿勢をとらねばならないからである」。だから「敵方が提起するのを待つ」のが得策であると考えた(「313. 毛沢東關於停戦談判問題致高岡、金日成電」1951 年 6 月 13 日 [朝戦档案-中: 808-809])。
- <sup>29</sup> 6 月 23 日、ソ連国連代表マリクは国連のラジオ演説のなかで朝鮮問題にふれた。数日後、グロムイコ外務次官はカークソ連駐在米国大使と会談し、マリク演説にふれながら「ソビエト政府はつねに朝鮮問題の平和的解決を支持してきた」と説明した。ここでかれは「戦闘行為の停止」を支持したが、「政治的・領土的問題」については「特別な形式のもとで解決すべき」だとして深入りを避けた。さらに「マリクの声明が北京当局の見解を反映しているかどうかソビエト政府はご存じか、また北京がどのように見解を表明すべきかについてソビエト政府に提案はあるか」と水を向けられたグロムイコであるが、これについてもかれは「知らない」とあっさり躲けている。(Запись беседы А. А. Громыко с А. Г. Кэрком, 27 июня 1951 г. [CAO, но.116: 385-386])。

- 直接の関与を嫌うソ連であるが、このマリク演説によって米国側の態度が軟化し、停戦交渉の機運が熟してきたと毛沢東はスターリンに報告していた。いわく「マリクの演説によって、われわれは平和交渉問題で主導権を得た」(毛からスターリン宛電報、1951 年 6 月 29 日 [毛年譜 -1: 365、同日条])。あるいは毛はつぎのようにも伝えている。マリク「演説は朝鮮停戦問題に関する米国人の関心呼んだ」。6 月 28 日付「合同通信社のワシントン発報道」によれば、「米国人陸軍将官および上級将校は日ごと朝鮮における停戦への期待を膨らませている、リッジウェイは停戦の可能性を検討するため米統合参謀本部議長とつねに連絡を取っている」。「流布している情報によれば、リッジウェイは米国防総省から指示を受ければすぐにでも北朝鮮軍司令官と交渉に入る」(Шифртелеграмма-1)。
- <sup>30</sup> 毛いわく「もし本当に談判を行うのであれば、敵方にだまされないためにも、この談判にたいする貴殿のきめ細かい指導が必要である」(毛からスターリン宛電報、1951 年 6 月 29 日 [毛年譜 -1: 365、同日条])。翌日にもかかれはスターリンに畳みかけるようにこの件をうたえている。いわく「時間が切迫しており、当該会議が重大であることに鑑みて、貴殿 [スターリン] には金日成同志と直接連絡をとり、この会議について個人的な指導をしていただくと同時に、わたしに [その件] ご報告いただきたい。」(Шифртелеграмма-2)。
- <sup>31</sup> スターリンは毛に宛てていわく「貴殿は自身の電報にてわれわれがモスクワから停戦交渉を指導するよう提案されている。これは当然ながら、到底考えられないことであり、不要でもある。貴殿、毛沢東同志が指導すべきである。われわれにできるのは、せいぜい各問題にたいする助言である。われわれは金日成と直接的連絡を保持できるわけでもない。貴殿が [その直接的] 連絡を保持すべきである」(Шифртелеграмма-3)。
- <sup>32</sup> その詳細については、松村 (2018) 参照。
- <sup>33</sup> 毛沢東の準備した緩衝地帯案はつぎのものであった。「双方の陸海空軍は 38 度線から 10 マイルの距離に撤退し、38 度線以南・以北それぞれ 10 マイルの地区に緩衝地帯を設けなくてはならない。緩衝地帯の民政は 1950 年 6 月 25 日以前のものとしなければならない。つまり 38 度線以北は朝鮮人民政府の管轄下、38 度線以南は南朝鮮政府の管轄下にそれぞれおかねばならない」(Шифртелеграмма-4)。
- <sup>34</sup> Шифртелеграмма-5。
- <sup>35</sup> 詳細は松村 (2018)。
- <sup>36</sup> 当時、周恩来はロシチン駐華大使に「中国政府はふたつ大きな難題を抱えている。いずれの難題も [朝鮮] 戦争の継続によって肥大化する」と陳情していた。「第一の難題は巨大な財政的逼迫」であり、「現在すでに予算の 60% 以上を軍需に費やしている」という状況にあった。いまひとつの難題は「幹部の著しい技術不足」であった(Запись беседы Н. В. Рошина с Чжоу Энь-Лаем [会談は 7 月 24 日、文書作成・送付は 27 日]、КСО -9: 2089)。持久戦をこなすにも国家建設の基盤づくりが喫緊の課題であった。
- <sup>37</sup> 当時、北京がアジア諸国の模範となり、それを助力することについては政府の外交姿勢としても、また党務の方針としても疑いなくあった。
- たとえば、周恩来は外交学会年次大会にて「中国人民の勝利は世界の勢力バランスを根本的に変化させ、民族解放運動の比重が著しく大きくなった」、「われわれの任



務は民族解放運動の発展を支持し、推進することにある」とうたえていた（「民族解放運動的国際地位和作用」講話節録、1951年4月9日[周外交：36-37]）。また劉少奇は党の歴史的任務について報告するなかでいわく、「帝国主義の脅威は、朝鮮・香港・日本・ベトナムおよびその他地域に依然深刻に存在する。中国には隣国の革命を援助し、帝国主義に反対する任務がある」（「中国共産党今後の歴史任務」[1951年7月5日、中南海春藕齋において劉が中共中央 ML 学院第一班学生向けに行った報告の要綱。標題は原稿に記されたもの]、劉文稿 3：537、547 [注 1]）。

劉少奇のこの報告だけみれば、日本と朝鮮・ベトナムを同列にしているように読める。ただ、後述のように事情はそれほど簡明ではない。

<sup>38</sup> 「三五、中共創建三十周年に際する中共幹部の論文」（六月二十二日付コミンフォルム機関紙より訳載）（一）「中国革命の国際的意義」（中国共産党中央委員陸定一）（日刊労働通信社編 1953：362、358-259）。

<sup>39</sup> 「三四、インド共産党綱領草案」（一九五一年五月十一日付コミンフォルム機関紙より訳載）（日刊労働通信社編 1953：350-351、356）。

<sup>40</sup> Адырхасев (1990: 141/ 155-156). 邦訳版によれば、別荘からの呼び出しというのは「電話」でなされたい。

<sup>41</sup> Там же: 141/ 156.

<sup>42</sup> Там же: 142/156.

<sup>43</sup> Там же: 142/ 156.

<sup>44</sup> Там же: 142/ 156.

<sup>45</sup> Там же: 142/ 156-157.

<sup>46</sup> 通訳いわく、「会談の雰囲気は温かく率直で、なによりもスターリンは客人をいっさい非難せず、かれらと『対等』に会談を進めたのだった。日本人同志もこのことに大変気をよくした。会談当初にかれらが感じていた緊張感はずれた」。また「スターリンは日本人同志が文書づくりに成功するよう望んだ」とのことである（Там же: 142/ 157）。

<sup>47</sup> Там же: 142/ 157.

<sup>48</sup> Там же: 142/ 157. モロトフ文書に当たった下斗米によれば、5月13日、ソ連共産党国際委員会からスターリンに宛て報告がなされ、そのなかで原案「日本における当面する革命（日本共産党綱領）」にたいして「日本の『同志』たちから『修正』と『補足』とが寄せられた」という。日本側から出された修正意見は「米独占と日本の買弁的資本による直接的搾取」の「直接」を削除するなど「ごく微細な修正であった」という。一方、「補足」については「やや大きなものであった」ようである。なかでも日本革命の国際的意義について補足意見が述べられているという。たとえば、それが「第三次世界大戦の防止に意義がある」とことや「アメリカの帝国主義者」による日本の基地利用・経済的人的資源の利用などへの決定的打撃になることなどが言及されていた。詳細は下斗米(2011: 242-243) 参照。

<sup>49</sup> Адырхасев (1990:142-143/ 157-158).

<sup>50</sup> 引用文中のリチュリ[Ли Чули]は邦訳版では「李外里女史」となっているが、中国語読みで正確に対応しない（Там же: 143/ 158.）。上記の通り、王稼祥年譜によれば、当時王に随伴した通訳は林莉であるが、これまた中国語読みで正確に対応しない。その点で対応するのは李初梨[中聯部の日本専門家]であり、前述のとおりかれは北京からモスクワに随行したメンバーのひとりである。アドイルハエフの記憶が正しければ、李初梨が第三回会合に出席

したと考えられる。

<sup>51</sup> 北京機関の関係者であった藤井いわく、「後日、徳田が語ったところによれば、この綱領はスターリンの意見にもとづいてマレンコフが主としてまとめたものといわれている。これは翌五二年の西ドイツ共産党へ与えた統一綱領と同じく、スターリンの主動で生まれたといつてよからう。むしろ、テーゼ草案以来の徳田の意見が前提となっているには相違ないが、最も露骨なものは、E・H・カーのいう「東西対極の中間地帯」に楔を打ちこむというコミンフォルム（スターリン）の戦略的意志である」（藤井 1986: 141）。（）内は原文。以下、断りが無い限り同様。ルビ表記も原文。なお、当該作品は小説の形式をとりながら史実を再現しようとしたものであることから、ここでは傍証として参照するにとどめる。作品の性格については第4稿注 13 参照。

<sup>52</sup> Адырхасев (1990: 143/ 158-159).

<sup>53</sup> 下斗米は、綱領の一部に「メシタ」のようなややくだけた表現がみられるのは高倉テルが訳出したからだと推測している（下斗米 2011: 244）。

<sup>54</sup> Адырхасев (1990: 143/ 159).

<sup>55</sup> 渡部富哉から伊藤律へのインタビュー（伊藤書簡集：237）。

<sup>56</sup> 日本共産党中央委員会（2003: 111）。

<sup>57</sup> 自己弁護と免責に忙しい回想を字義どおり信頼するのは躊躇されるが、袴田もまたつぎのように書き残している。「あとからわかったのだが、このとき[徳田らのモスクワ滞在時]「五一年綱領」のほかに、具体的な武装闘争のありようを説いた戦術の方針も決められた」。これが五全協で「採択された指針『われわれは、武装の準備と行動を開始しなければならない』となるもので、この小論は、やがて『球根栽培法』という表題で地下出版される」。「モスクワでは、後者の文書は見せられなかった」（袴田 1978: 94）。

<sup>58</sup> Выписка из протокола но.82 заседание Политбюро ЦК ВКП(б) (КСО-9: 2080). 波線は原文。

<sup>59</sup> 下斗米 (2011: 246, 269 [注 50])。

<sup>60</sup> 和田は結論を急がず、あえてこの時期を特定していない（和田 [2002] 2012: 324-325）。

<sup>61</sup> 本人によれば、「モスクワでの生活が四か月になろうというころ、八月（[昭和] 二十六年）に入って間もなく」、スターリンとの面会に呼ばれたという（袴田 1978: 93）。なお、伊藤律の年譜を編纂した渡部はこの袴田の回想に依拠したのか、伊藤の証言に拠ったのか判然としないが、この会談を「8月上[旬]」としている（伊藤書簡集：395）。

<sup>62</sup> 6月6日以降、王の足取りはつかめないが、6月30日には北京の先農壇体育場にて中共成立 30 周年慶祝大会に出席している（王年譜：402 [6月30日条]）。

<sup>63</sup> 袴田 (1978: 97) ; 下斗米 (2011: 268-269 [注 48])。

<sup>64</sup> Адырхасев (1990: 143144/ 159-160). 前述のとおり、アドイルハエフは日共代表団が4月末から1ヶ月半[6月中旬か] 滞在したとしているが、さいごに「代表団は夏にモスクワから北京に経ったが、すでに 1951 年 9 月サンフランシスコにて対日講和条約が締結されていたのであった」とも記している。またこの回想録に解題を付けた歴史家 A. セナトロフも「1951 年夏モスクワにおける日共指導者とスターリンとの面会」と表現している（Там же: 144/ 160-161）。なお、袴田自身はさいごの面会で「別れるとき、スターリン」から「あなたは健康がすぐれないと聞いている。ソ連で十分療養していつてはどうか」と言われ、9月にモ

- スクワからクリミヤに療養へと経ったという。一方、徳田、野坂、西沢、王稼祥は会談後まもなく北京へ帰ったらしい（袴田 1978: 101-102）。
- <sup>65</sup> 袴田（1978: 101）。
- <sup>66</sup> おそらく徳田本人から聞いたのであろう、後年伊藤律いわく、袴田は「徳田球一らとスターリンの会談の後で、スターリンに呼ばれて入ってきた。徳田とはそこで会った」（渡部富哉から伊藤律へのインタビュー〔伊藤書簡集：237〕）。ここでは日付が特定されていないが、発言の趣旨から推せば、6月6日に第三、四回会合がいずれも行われたように見受けられる。
- <sup>67</sup> 袴田（1978: 93-94）。
- <sup>68</sup> 同上：94-95。
- <sup>69</sup> 安斎は李初梨と袴田を合わせて評していわく、「ああいう極左冒険主義に対して李初梨なんて反対ですよ。袴田里見もそれについては反対してた」、袴田も訪ソ団に「入ったわけ。袴田はその前から、香港から北京に来たときから、その萌芽があったわけですよ、極左冒険的な。これには反対してたわけです」（安斎・竹中 2018: 131-132）。
- <sup>70</sup> 当人いわく、「時刻はすでに夜の九時に近い。スターリンは、いつも午前二時、三時まで起きているから、九時はまだ宵の口ということらしくった。すぐに、私たちは車で宿舎を出発した」。その後、「通された部屋は一階の大広間で、真ん中に大きな会議用のテーブルが置いてあるほかは、調度品のようなものはほとんどなく、がらんとしていた。目につくものといえば、天井からさがっているシャンデリアと床に敷いてある厚い絨毯くらいのもので、案外質素だなと思った」（袴田 1978: 95-96）。
- <sup>71</sup> 同上：96-97。
- <sup>72</sup> Адыхасв (1990: 143-144/ 159-160). ちなみに会談時に袴田は日本代表団の他のメンバーとは離れ、会談するのに十分な長さのテーブルの端に座った」というのがアドイルハエフの言である（Там же: 143/ 159）。なお、近年日共の正統な見解では当日の列席者をスターリン、マレンコフ、ベリヤ、モロトフとしており、この点に限っていえば、袴田説と同一である（不破 1993: 325）。
- <sup>73</sup> 袴田（1978: 97, 99, 101）
- <sup>74</sup> 同上：97-98。
- <sup>75</sup> Адыхасв (1990:143/ 159)。
- <sup>76</sup> 袴田（1978: 99）。
- <sup>77</sup> Адыхасв (1990:143/ 159). この件については袴田の述懐ともそれほど大きな齟齬はない。かれによれば、スターリンいわく「袴田同志、あなたたちは、いま党中央に対して反対派をつくっている。これはよくない。あなたは、金属労働者ではないか。だから十分わかると思うが、労働者は団結しなければ勝利はできない。それなのに反対派をつくって、はたして勝利できるだろうか。このテーゼ（五一年綱領）はわれわれも協力して仕上げたものである。この方針に基づいて。日本の党は前進してほしい」。袴田にはとりわけ印象が強かったのか、このときスターリンが「どういうわけか三度も、『あなたは、金属労働者ではないか』といった」ことを付け加えている（袴田 1978: 98-99）。
- <sup>78</sup> 同上：99。
- <sup>79</sup> Адыхасв (1990:143/ 159)。
- <sup>80</sup> Там же: 143/ 159。
- <sup>81</sup> Там же: 143/ 159-160。
- <sup>82</sup> Там же: 143-144/ 160。
- <sup>83</sup> 本人によれば、自己批判書は「スターリンとの会談のあと宿舎で書いたものだ」という（袴田 1978: 100-101）。

- <sup>84</sup> さいごの会合から日共幹部の北京帰還、さらに五全協までの言及箇所にとそれとらしい記述はない（Адыхасв 1990:143-144/ 159-160）。
- <sup>85</sup> 本人の回想いわく、「スターリンから『自己批判』を要求され、しぶしぶ応じたものの、私にとっては屈辱的なことであった。分裂の原因をつくった徳田たちが非難されないで、あおりを食ったわれわれ（いわゆる国際派）が『分派』とみなされ、『分派』をつくったことについて自己批判せよという。これは、どういうことか」。また「その自己批判書は、いま見ても不愉快である」。「『五一年綱領』といい、『自己批判書』といい、私にとっては不本意なことばかりであった」（袴田 1978: 100-101）。
- <sup>86</sup> 日本共産党中央委員会（2003: 111）。
- <sup>87</sup> 袴田（1978: 100）。
- <sup>88</sup> 袴田里見「私は分派と一切の関係を断ち分派根絶のために闘争する」『内外評論』第2巻第17号（通巻第26号）『健康法』第26〔ママ〕号、1951年8月23日付（日刊労働通信社編 1952: 55-57）。
- <sup>89</sup> 同上：55, 58。
- <sup>90</sup> 同上：57。
- <sup>91</sup> 名義は不明だが事実上、臨中の手によると思しき解説文が袴田の自己批判書に付されている。その解説もまた内向き志向はなほだしい。冒頭で「わが党は、日本のあらゆる進歩勢力を結集して、日本をどれい状態から解放するために正しい方針のもとに闘っている。分派主義者たちの行動は、この正しい方針に反しており、理論的にも、実践的にも誤っている。彼等は、党の鉄の規律を破り、革命を誤った方向へ導くことによって帝国主義に奉仕しているのである」として、袴田と危機感を共有する。また「かれ〔袴田〕が過去の誤りを認め自己批判を発表したことを、われわれは心から喜ぶ」として、かれが「分派からはなれ、分派と闘う立場から自己批判を行ったのは正しい方法である」と評す。ただ、「かれ〔袴田〕の自己批判の中には、事実と違っている部分もある」と難じ、「初めは分派主義者と闘っていた」という袴田の主張を斥け、「かれは初めから分派活動との闘争に参加しなかった」といった例などを挙げているが、いずれも党内政治に関わる点ばかりである（「同志袴田里見の自己批判について」『内外評論』第2巻第17号（通巻第26号）『健康法』第62〔ママ〕号、1951年8月23日付（日韓労働通信社編 1952: 53-54）。これもまた日米支配層との闘争にむけた切迫感に欠けている。
- <sup>92</sup> 最初の路線が力石定一ら、つぎが中国地方委員会と全学連系の黨員、さいごがおおむね新日本文学会黨員であったという（亀山 1978: 156-157）。
- <sup>93</sup> 同上：157, 160。
- <sup>94</sup> 同上：176。

＜参考文献（一次史料・資料の文献名は略記し、各文献の冒頭に【】で示した）＞

#### 日本語

安斎庫治述・竹中憲一編（2018）『日本と中国のあいだで：安斎庫治聞き書き』皓星社。

【安斎座談】安斎庫治追悼集刊行委員会編（1995）『安斎庫治追悼集』平河工業社、169-187頁。

- 【伊藤書簡集】渡部富哉監修伊藤律書簡集刊行委員会編（1999）『生還者の証言：伊藤律書簡集』五月書房。
- 亀山幸三（1978）『戦後日本共産党の二重帳簿』現代評論社。
- 下斗米伸夫（2011）『日本冷戦史：帝国の崩壊から55年体制へ』岩波書店。
- 日刊労働通信社編（1952）『日本共産党の文献集（第三編）』日刊労働通信社。
- 日刊労働通信社編（1953）『コミンフォルム重要文献集』日刊労働通信社。
- 日本共産党中央委員会（2003）『日本共産党の八十年 1922~2002』日本共産党中央委員会出版局。
- 袴田里見（1978）『私の戦後史』朝日新聞社。
- 藤井冠次（1986）『創作・遠い稲妻：伊藤律事件』驢馬出版。
- 不破哲三（1993）『日本共産党にたいする干渉と内通の記録：ソ連共産党秘密文書から』下巻、新日本出版社。
- 松村史紀（2018）「サンフランシスコ講和会議と中ソ同盟（1949-52）：東側世界の「全面講和」外交（2）」『宇都宮大学国際学部研究論集』第45号、2018年2月、107-125頁。
- 和田春樹（[2002]2012）『朝鮮戦争全史』岩波書店。

#### 中国語〔日本語音読み順に配列〕

- 【王年譜】徐則浩編著（2001）『王稼祥年譜 一九〇六—一九七四』北京：中央文献出版社。
- 【周外交】中華人民共和国外交部、中共中央文献研究室編（1990）『周恩来外交文選』中央文献出版社。
- 【周年譜】中共中央文献研究室編（1997）『周恩來年譜一九四九—一九七六』上卷、中央文献出版社。
- 【周文稿】中共中央文献研究室・中央檔案館編（2018）『建國以來周恩來文稿』第4冊、中央文獻出版社。
- 【朝戦档案】沈志華編（2003）『朝鮮戦争：俄国档案館の解密文件』各冊、台湾：中央研究院近代史研究所。
- 【毛軍事文稿】中共中央文献研究室、中国人民解放軍軍事科学院編（2010）『建國以來毛沢東軍事文稿』上卷、北京：軍事科学出版社・中央文獻出版社。
- 【毛年譜】中共中央文献研究室編（2013）『毛沢東年譜 1949-1976』1卷、中央文獻出版社。
- 【劉文稿】中共中央文献研究室・中央檔案館編（2005）『建國以來劉少奇文稿』各冊、中央文獻出版社。

#### ロシア語

- Адирхаев, Николай Борисович (1990). Встреча Сталина с японскими коммунистами // Проблемы дальнего востока, №.2: 140-147 (アドイルハエフ「スターリンと日本の共産主義者らとの会合」『極東の諸問題』19巻4号、1990年8月)。
- 【КНР】 Китайская Народная Республика в 1950-е годы: Сб. Док-тов: в 2 т. / под ред. В.С.Мясникова. Т.2: Друг и союзник нового Китая / сост. Е.Р. Курапова, В.С. Мясников, А.А. Чернобаев. Москва: Памятники исторической мысли, 2010.
- 【КСО】 沈志華、李丹慧収集和整理（2004）『中蘇關係：俄国档案原文復印件匯編』上海：華東師範大学国際冷戦史研究中心
- 【САО】 Советско-американские отношения. 1949-1952 / Под ред. Г.Н. Севостьянова; Сост. В.М. Семенов, И.В. Макарович, А.И. Петренко. Москва: Международный фонд: Материк, 2006.
- 【Шифртелеграмма-1】 Шифртелеграмма Мао Цзэ-дуна Филиппову, 30 июня 1951 г. [https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/110371 (露文版、2021年5月29日最終アクセス)]
- 【Шифртелеграмма-2】 Шифртелеграмма Мао Цзэ-дуна Филиппову, 30 июня 1951 г. [https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/119390 (露文版、2021年5月29日最終アクセス)]
- 【Шифртелеграмма-3】 Шифртелеграмма Филиппова С.А. Красовскому, 30 июня 1951 г. [https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/110374 (露文版、2021年5月29日最終アクセス)]
- 【Шифртелеграмма-4】 Шифртелеграмма Мао Цзэ-дуна Филиппову, 3 июля 1951 г. [https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/110022 (露文版、2021年5月29日最終アクセス)]
- 【Шифртелеграмма-5】 Шифртелеграмма Мао Цзэ-дуна



Филиппову, 20 июля 1951 г. [<https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/119538>] (2021 年 5 月 29 日最終アクセス)

# **A “Military Policy” of the Japanese Communist Party and the Sino-Soviet Alliance, 1949-1955:**

## **Dependence and Independence in the Eastern Bloc (6)**

MATSUMURA Fuminori

### **Abstract**

From May to June 1951, a series of talks were held between top leaders of the Soviet, Chinese and Japanese communist parties in Moscow. Previous studies claim that the Kremlin enforced Japanese comrades to employ the so-called “military policy” in the meetings. Joseph V. Stalin, however, had good reason to put the swift reunification of the divided Japanese Communist Party [JCP] ahead of compelling the latter to accept a radical formula. This presumption can be supported by four points.

First, the JCP had already embraced its own “military policy” in the 4th National Convention well before Japanese communists met with Stalin in Moscow. Therefore, the latter was not necessarily required to direct such a policy to the former.

Second, Stalin devoted considerable efforts to reunify the JCP under the leadership of the mainstream faction. He met only with the mainstream members (i.e., Kyuichi Tokuda, Sanzo Nosaka and Takaji Nishizawa) in his first three meetings in which the final draft of the JCP’s new platform was unilaterally formulated. Satomi Hakamada, an opposing member, was invited only to the last forth session in which he had virtually no power to resist the above-mentioned unilateral decision. The Kremlin was indeed a lopsided mediator for Japanese comrades, but it apparently demanded the mainstream faction as well as opposing members to present their self-criticism to reunify the party. One cannot, however, overestimate Stalin’s substantial influence on Japanese comrades because their self-criticism was focused more on inner-party politics and less on anti-imperialist struggles in which Moscow expected the JCP to be intensively engaged.

Third, Stalin was reluctant to apply Beijing-style armed struggle to highly industrialized states. In February 1951, he persuaded Indian communist leaders to reunify their divided party and consolidate their political foundation among the masses rather than accelerating armed struggle because local conditions were quite different between India and China: the former lacked liberation armies and extensive farmlands in which the latter enjoyed great advantages in conducting guerrilla warfare; the latter was backed by its neighbor (i.e., Moscow), while the former was geopolitically isolated without any backers. Stalin was likely to have similar considerations in handling the JCP’s problems.

Forth, Moscow had no illusion about overthrowing an Anglo-Americans’ effort to secure the “separate” peaceful settlement with Japan merely by intensifying local communist armed struggle. In East Asia, the communist bloc barely secured the northern part of the Korean peninsula and hence found it virtually impossible to evict hostile forces from the peninsula, the Taiwan strait and Japan.

(2021 年 5 月 31 日受理)